

# 1. 文学部・人文科学研究院

I	文学部・人文科学研究院の研究目的と特徴	・	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・ ・	1 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	・ ・ ・ ・ ・	1 - 12
III	質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・	1 - 14

## I 文学部・人文科学研究院の研究目的と特徴

1. 文学部・人文科学研究院の研究目的は、以下の通りである。
  - ① 人間の学としての人文科学の確立
  - ② 原典の精確で豊かな理解、理論と実証の高度な融合
  - ③ 国際レベルの研究の推進
2. 文学部・人文科学研究院は1の研究目的を達成するための具体的研究目標を以下のものとしている。
  - ① 国際レベルの個別研究及び相互交流の促進
  - ② 「共同研究プロジェクト」の計画・実施：人文科学研究院の各分野内のみならず、諸分野を横断するような共同プロジェクトを実施する。

尚、これに準じて作成した以下の人文科学研究院の中期目標は、九州大学学術憲章に沿ったものであり、また、九州大学全体の中期目標を踏まえたものである。

- ① 世界水準の研究の推進と中核的研究拠点の形成を目指す。
  - ② 国際的研究協力体制を整備する。
  - ③ 現代社会が直面する諸問題に真摯に取り組み、その解決の指針を社会に向かって提示する。
3. 文学部・人文科学研究院に共通する人文学研究の特徴は以下のものである。
    - ① philosophia（フィロソフィア、知への愛）と philologia（フィロロギア、言葉への愛）の精神に基づくフマニタスの学（人間の学、人間の研究）。
    - ② 言葉の重視。
    - ③ 批判精神に基づく批判の学。

また、このような共通の特徴を基盤としながら、実に多種多様な専門分野が一堂に会しているのが人文学の魅力であり、特徴でもある。各専門分野がそれぞれにしっかりした核を持ち、同時にあらゆる専門分野に開かれていて、全体として一種の普遍的人間学を形成していることこそ、他では見られない人文学の一大特色である。

4. 1、2に基づく、部門ごとの研究目的は以下のものである。

### (1) 哲学部門

人類の過去の文化遺産を歴史的かつ体系的に研究すると同時に、現代の人間と社会が直面する様々な問題に根本的かつ将来的な視点から取り組むことをめざす。

### (2) 歴史学部門

時代に即した新たな研究・教育を行うために、分析視角や方法論の再検討と新たな研究・調査手法の開発に努める。また地域社会との連携を積極的に進めることで、こうした成果を社会に還元し、さらなる研究・調査手法を模索する。

### (3) 文学部門

学問領域の個別性と普遍性のバランスに常に留意することで、高度な専門性に裏付けられた人文学の新たな総合的知見を獲得すること、別言すれば、言語（ことば）をめぐる専門研究を通じて一種の普遍的人間学の形成を目指す。

### [想定する関係者とその期待]

1、2で挙げた研究目的、研究目標に照らし、本研究院は、それぞれの分野の関連学会において先導的役割を果たし、また国際的研究を推進することにより、国際社会における学術的貢献に努め、さらには、地域社会、国、地方自治体に研究成果を還元することによって、学術文化の発展に寄与することが期待される。

## II 分析項目ごとの水準の判断

## 分析項目 I 研究活動の状況

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

前頁で述べた研究目的、目標 (<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/enkaku.html>、<http://www.kyushu-u.ac.jp/university/plan/bukyoku.pdf> 参照) の達成に向けて、本研究院は資料 1-A に示すように 3 部門 18 講座で構成される。教員の配置は各講座 2 名～4 名である。

本研究院では、研究活動の実施に関して、平成 17 年度に自己点検・評価報告書を作成し、それに基づき、外部評価を行った。そして、その結果を平成 18 年度に外部評価報告書として刊行し、一部をウェブ上で公開している (<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/gaibu18.pdf>)。

## 資料 1-A 本研究院の教員配置

部門	講座	教授	准教授	講師	助教	計
哲学	哲学, 倫理学, インド哲学史, 中国哲学史, 芸術学	8	4	2	1	15
歴史学	日本史学, 東洋史学, 朝鮮史学, 考古学, 西洋史学, イスラム文明史学, 地理学, 歴史学拠点コース	9	7	3		19
文学	国語学・国文学, 中国文学, 英語学・英文学, 独文学, 仏文学, 言語学	9	8		1	18
計		26	19	5	2	52

(2007. 5. 1. 現在)

本研究院所属教員の過去四年間の業績・共同研究の推移を示したものが資料 1-B である。特に著書・翻訳書は年間 15 冊以上がコンスタントに刊行されており、高い水準にあるといえる。論文数は、平成 17・18 年度はいずれも 100 件を超えており、増加傾向が読み取れる。学会発表も国内・国外問わず活発に行われている。学会賞の受賞などもほぼ毎年 1～2 件あり、所属教員の研究が高く評価されていることを示している。また共同研究が 27～39 件と増加しており、各教員が個人研究のみならず、他大学・研究機関の研究者とも広く連携をとりつつ研究を進めていることがわかる。

また資料 1-C は研究資金の獲得状況を示しているが、特に科学研究費は平成 17 年度以降、30 件以上の研究代表者の件数を維持しており、所属教員の全体数(52)からみても 70% 前後の高い採択率であるといえる。また研究分担者の件数もそれをやや上回る数字であり、国外の研究者との共同研究も含め、全体として活発な研究活動が継続的に行われていることを示している。(資料 1-I、1-J も参照)

## 資料 1-B 研究活動の実施状況 (人文科学研究院)

研究の区分		平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	合計 (1人 あたり)
論文	レフェリー付学術雑誌等論文発表数	18	26	25	17	86
	国際誌発表数	9	11	10	6	36
	その他の論文発表数 (紀要等)	51	63	73	47	234
	小計	78	100	108	70	356(6.98)
著書・翻 訳書	専門書 (著書) 等発行数	13	12	11	12	48
	翻訳書等発行数	2	5	7	4	18
	小計	15	17	18	16	66(1.29)
学会発表 等	学会発表件数 (国内学会)	34	45	50	27	156
	学会発表件数 (国際学会)	18	39	24	24	105
	小計	52	84	74	51	261(5.12)
受賞等	学会賞等各賞の受賞件数	2	0	1	2	5(0.1)
共同研究	共同研究の実施数	27	31	33	39	130(2.55)

## 資料 1-C 研究資金の獲得状況 (人文科学研究院)

研究資金 の区分		平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度	合計 (1人 あたり)
科学研究 費	科学研究費の採択件数 (研究代表者)	27	39	38	34	138
	科学研究費の採択件数 (研究分担者)	30	40	46	46	162
その他の 外部資金	その他外部資金獲得件数 (代表のみ)	2	2	2	5	11
	小計	59	81	86	85	311(6.08)
共同研究 等	共同研究件数 (国内)	11	13	18	20	62
	共同研究件数 (海外)	5	7	7	9	28
	小計	16	20	25	29	90(1.76)

(本調査表作成時に本研究院に在籍の講師以上の計 51 名の教員の業績に基づく)

こうした共同研究の各講座別の状況を示したものが資料 1-D である。国内での学際的共同研究に加え、東アジアから欧米圏に至るまで、海外の研究者との国際的共同研究が継続的に実施されている。

## 資料 1-D 国際的及び他大学との共同研究の講座別実施状況

講座名	研究概要	実施年
芸術学講座	・ 東京大学東洋文化研究所との共同研究 ・ 国際日本文化研究センターとの共同研究	平成 13 年～ 平成 15～17 年
東洋史学講座	・ 21 世紀 COE プログラム「東アジアと日本：交流と変容」による「東アジア史研究コンソーシアム」として南京大学、復旦大学、全北大学校、山東大学、華東師範大学、東亜大学校との共同研究 ・ 国立歴史民俗博物館との共同研究	平成 14～18 年  平成 18 年～
考古学講座	・ ロシア社会科学アカデミーとのシベリア新石器時代遺跡共同調査 ・ 中国社会科学研究院考古研究所との初期青銅器共同研究 ・ 中国山東大学等との水稻農耕伝播起源地に関する共同研究 ・ 中国四川大学等との中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開に関する共同研究	平成 13～19 年 平成 15～19 年 平成 16～20 年 平成 19～20 年

西洋史学講座	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京大学、京都大学、北海道大学、名古屋大学、一橋大学などの研究者（西洋史学、法制史学、経済史学）との共同研究</li> <li>・本学法学研究院および経済学研究院、熊本大学、長崎大学などの研究者（西洋史学、法制史学、経済史学）との共同研究</li> <li>・外国人研究者との共同研究： カトリック・レウヴァン大学、ブリュッセル自由大学、オルレア ン大学、リル第3大学、ソルボンヌ高等研究院</li> <li>・国文学研究資料館との共同研究(アーカイヴズの国際比較史研 究)、韓国国史編纂委員会、復旦大学、アンカラ大学、フランス 国立古文書学校</li> </ul>	<p>平成 9 年～</p> <p>平成 15～19 年</p> <p>平成 16～18 年</p> <p>平成 16～20 年</p>
イスラム文明 史学講座	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カイロ大学文学部歴史学科との共同研究</li> <li>・アンカラ大学言語・歴史地理学部との共同研究</li> </ul>	<p>平成 13～18 年</p> <p>平成 18 年</p>
独文学講座	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学講座との共同研 究「文学表現と〈記憶〉ードイツ文学の場合」</li> <li>・「ドイツ近・現代文学における〈否定性〉の契機とその働き」に 関する共同研究</li> <li>・外国人研究者との共同研究： ドイツ・ボン大学、ドイツ・元マンハイム国語研究所、ドイツ・ フランクフルト大学、ドイツ・ケムニッツ大学</li> </ul>	<p>平成 15～18 年</p> <p>平成 18～21 年</p> <p>平成 19 年</p>
仏文学講座	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンドレ・ジッド『法王庁の抜け穴』生成批評版の解題作成と関 連資料・書誌の校閲を仏英の研究者（パリ第4大学、シェフィー ルド大学）と共同で担当</li> </ul>	<p>平成 16 年～</p>
言語学講座	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京大学、神戸松蔭女子大学、南カリフォルニア大学等の言語学 者との共同研究</li> <li>・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との研究者コミ ュニティーの形成</li> </ul>	<p>平成 15～17 年</p> <p>平成 17～19 年</p>

このなかで、平成 18 年度に終了した九州大学 21 世紀 COE プログラム「東アジアと日本：交流と変容」（拠点リーダー：今西裕一郎教授）は、特に歴史学部門の教員を中心として人文科学研究院における共同研究の主軸の 1 つとなっている。

本プログラムは平成 14 年度から 5 年間にわたり、人文科学研究院と比較社会文化研究院の東アジア関連分野を専攻する教員が中心となって実施された。東アジア諸社会間の〈文化交流〉と、〈アイデンティティの形成・変容〉を切り口として横断的に結集し、それによって九州大学の人文科学分野を、〈東アジア/日本〉研究に関する世界的成果の発信と現代社会への貢献の拠点に育て上げることを目標としたものである（資料 1－E 記載のホームページより）。また平成 16 年度に実施された中間評価の結果に基づき、平成 17 年度以降は「東アジア諸国家とその形成過程の比較研究」および「内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム」の 2 つのサブテーマに再編し、2 名の事業推進担当者の追加によって事業内容を強化した。その成果は、優れた研究の 1015～1017 にも挙げた論文集・統括ワークショップの報告書として結実している（資料 1－E）。また資料 1－F に示すように、中国・韓国・連合王国を中心とした各地の研究機関・大学との東アジア研究の学術交流の場として平成 17 年度より「東アジア史研究コンソーシアム」が組織され、平成 19 年度までに 3 回の国際シンポジウム・院生ゼミを開催した。

## 資料 1-E 九州大学 21 世紀 COE プログラム「東アジアと日本：交流と変容」の概要

本研究院・学府所属 の 事業推進担当者	今西裕一郎（拠点リーダー）、宮本一夫、迫野虔徳、濱田耕策、川本芳昭、佐伯弘次、坂上康俊、清水宏祐、船田善之、四日市康博
共同研究の主な成果 （3点）	今西裕一郎編『九州大学 21 世紀 COE プログラム 東アジアと日本：交流と変容 統括ワークショップ報告書』, pp.1-233, 平成 19 年 田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論－プロセス・モデル・アイデンティティ－』, pp.1-385、平成 18 年、すいれん舎 森川哲雄・佐伯弘次編『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』, pp.1-250, 平成 18 年、権歌書房
学内定例研究会・ゼミ （それぞれほぼ毎月開催）	「交流と変容」研究会 「東アジア諸国家とその形成過程の比較研究」領域横断ゼミ・研究会 「内陸圏・海域圏交流ネットワーク」領域横断ゼミ・研究会
研究紀要	和文紀要：『東アジアと日本－交流と変容－』, 年刊（創刊 平成 16 年） 英文紀要： <i>Interaction and Transformations</i> , 年刊（創刊 平成 15 年）
ホームページ等	「東アジアと日本：交流と変容」ホームページ： <a href="http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/21coe/index.html">http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/21coe/index.html</a> 日本学術振興会ホームページにおける事後評価と実績報告書： <a href="http://www.jspss.go.jp/j-21coe/08_jigo/data/jigo_kekka/d13.pdf">http://www.jspss.go.jp/j-21coe/08_jigo/data/jigo_kekka/d13.pdf</a> 歴史学拠点コースホームページ： <a href="http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/">http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/coe/</a>

## 資料 1-F 東アジア史研究コンソーシアム締結研究機関・大学一覧

国名	機関・大学名
中華人民共和国	中国社会科学院、北京大学、山東大学、復旦大学、華東師範大学、南京大学
大韓民国	韓国学中央研究院東北亜古代史研究所、東亜大学校、釜山大学校、全北大学校
連合王国	セインズベリー日本芸術文化研究所

また平成 18 年度に本 COE が終了後、その成果を継承・発展させる形で比較社会文化学府と合同で大学院人文科学府に歴史学拠点コースを開設した。人文科学研究院・比較社会文化研究院に所属する歴史学・地理学関係教員全員が参加して合同のゼミを実施している。

以上のように、COE プログラム自体は終了しているが、東アジア史研究コンソーシアムの実施をはじめとして、研究拠点としての機能を発揮しているといえる。

次に、人文科学研究院の各講座に事務局が置かれる学会・研究会とその実施状況を示したのが資料 1-G・H である。ほぼ全ての講座において 1 つまたは複数の学会・研究会の事務局が置かれており、学会・研究会が活発に行われていることを示している。

## 資料 1-G 各講座に事務局を置く学会・研究会等

講座名	学会・研究会等の名称	講座名	学会・研究会等の名称
哲学講座	九州大学哲学会	西洋史学講座	九州西洋史学会 九州史学会西洋史部会 近代国家研究会 西欧中世史料論研究会
倫理学講座	九州大学哲学会	イスラム文明史学講座	九州史学会イスラム文明部会
インド哲学史講座	西日本インド学仏教学会	国語学・国文学講座	九州大学国語国文学会 筑紫日本語研究会

中国哲学史講座	中哲懇話会 明儒学案研究会	中国文学講座	中国文芸座談会
芸術学講座	九州芸術学会 中世美術研究会 アジア近代美術研究会 ルネサンス文化研究会 近世美術研究会	英語学・英文学講座	九大英文学会 イギリス文学研究会
日本史学講座	九州史学研究会 九州史学会日本史部会	独文学講座	九州大学独文学会 トーマス・マン研究会
東洋史学講座	東洋史研究会 九州史学会東洋史部会	仏文学講座	九州大学フランス語フランス文学研究会
朝鮮史学講座	九州大学朝鮮学研究会 九州史学会朝鮮学部会	言語学講座	九州大学言語学研究会
考古学講座	日本中国考古学会 九州史学会考古学部会		

## 資料 1 - H 研究集会等の講座別開催状況

講座名	研究・集会等の名称および開催頻度
哲学講座	・哲学講座研究発表夏期合宿研修会(年1回) ・九州大学哲学会(年1回)
倫理学講座	・九州大学哲学会(年1回)
中国哲学史講座	・中哲懇話会(年4、5回)
インド哲学史講座	・西日本インド学仏教学会(年1回)
芸術学講座	・九州芸術学会(年2回) ・中世美術研究会、近世美術研究会、アジア近代美術研究会、ルネサンス文化研究会(各年数回)
日本史学講座	・九州史学会(大会・年1回、日本史部会・年1回)
東洋史学講座	・九州史学会(大会・年1回、東洋史部会・年数回) ・九州大学文学部東洋史学研究会(年1、2回) ・福岡大学、別府大学、久留米大学との共同研究会(年6回) ・国際シンポジウム「東アジアにおける交流と変容」(福岡国際会議場、平成16年9月)
朝鮮史学講座	・九州大学朝鮮学研究会(年4回) ・九州史学会(大会・年1回、朝鮮学部会・年1回)
考古学講座	・九州史学会(大会・年1回、考古学部会・年1回) ・日本中国考古学九州例会(年6回) ・日中共同研究「中国初期青銅器に関する考古学的研究」成果発表会(平成18年2月) ・ワークショップ「日本水稻農耕の起源地に関する総合的調査 粟島先史農耕文化の日中共同研究(平成19年7月)
西洋史学講座	・九州西洋史学会(年2回) ・九州史学会西洋史部会(年1回) ・近代国家研究会(年2回) ・西欧中世史料論研究会(年5回)
イスラム文明史学講座	・九州史学会(大会・年1回、イスラム文明学部会・年1回)
国語学・国文学講座	・九州大学国語国文学会(年1回) ・筑紫日本語研究会(隔月開催)

中国文学講座	・中国文芸座談会（隔月）
英語学・英文学講座	・イギリス文学研究会（随時） ・九大英文学会（年1回）
独文学講座	・九州大学独文学会（年1回） ・トーマス・マン研究会（年2回） ・九大独文科研研究会「ドイツ近・現代文学における〈否定性〉の契機とその働き」（2泊3日の研究発表会を年2回）
仏文学講座	・九州大学フランス語フランス文学研究会（年2、3回）
言語学講座	・九州大学言語学研究会（年5、6回） ・意図の伝達スキルに関する国際シンポジウム

資料1-Iは、各部門および部門共同で、共同研究のための研究会が積極的に開催されていることを示すものである。このうち哲学・文学部門では、両部門を横断した共同研究プロジェクトの構築という観点から研究会が継続的に行われている。また歴史学部門は、東アジアやイスラムに限らず広く歴史学・地理学の問題意識の共有という観点から「境界とネットワーク」と題した研究会を実施している。そして、これらの研究の一部は、資料1-Jに示されるように、学内において一定期間研究費等の重点配分を行う教育研究プログラム・研究拠点形成プログラム(P&P)の採択にも結びついている。さらに、資料1-Kに示すように、共同研究の成果の一部は公開講座として積極的に公表されている。

#### 資料1-I 共同研究のための研究会実施状況

部門	研究・発表内容等
歴史学部門	第1回 平成14年6月26日 宮本一夫：中心と周辺－漢王朝とその周辺地域との比較
	第2回 平成14年10月16日 清水宏祐：ペルシア語地理書における「境域」の概念
	第3回 平成16年6月25日 佐伯弘次：宗家文庫資料の形成過程と保存に関する基礎的研究 濱田耕策：崔致遠『桂苑筆耕集』に関する総合的研究
	第4回 平成16年1月28日 山内昭人：越境するネットワーク－片山潜、在米日本人社会主義団と初期コミンテルン－
	第5回 平成16年3月17日 中島楽章：元朝の日本遠征艦隊と旧南宋水軍－鷹島海底遺跡の南宋殿前司をめぐる文字資料－
	第6回 平成16年6月30日 遠城明雄：境界とネットワークからみた博多祇園山笠
	第7回 平成16年11月7日 山口輝臣：「国禁」と「信教自由」－琉球藩・浄土真宗・内務省
	第8回 平成17年3月3日 神寶秀夫：領邦居城都市における中間権力－絶対主義論の再検討
	第9回 平成17年6月22日 森平雅彦：朱子学の高麗伝来と対元関係
	第10回 平成17年11月16日 高木彰彦：「境界とネットワーク」研究構築に向けて
	第11回 平成18年3月22日 辻田淳一郎：古墳時代における「中心」と「周辺」－葬送儀礼の視点から－
	第12回 平成18年6月28日 岡崎 敦：比較史料論研究の視角と展望－記憶の管理と史料伝来の問題系を中心に－

	<p>坂上康俊：文書伝来の経緯に関する予備的考察 第13回 平成18年9月28日 2006年度九州史学会全体シンポジウム「記憶の管理と文書の伝来」のための研究会 岡崎 敦：西欧中近世の教会における文書史料管理について 森平雅彦：高麗時代文書史料の伝存状況とその特徴 中島楽章：明清文書史料の管理と伝来-徽州文書を中心に-</p> <p>第14回 平成19年3月14日 梶田 真：土木業における産業構成の形成メカニズムの解明に向けて 川本芳昭：漢唐間の歴史から見た日本史、中国史</p>
文学部門	<p>第1回 平成15年4月3日 小黒康正(ドイツ文学)：トポスとしての水の精-ヨーロッパ文学における一伝承形態</p> <p>第2回 平成15年7月3日 静永 健(中国文学)：日本に残存する白氏文集-平安古筆資料管見-</p> <p>第3回 平成15年11月20日 東口 豊(芸術学)：「伝統」形成における諸問題-Th. W. Adornoの音楽論を中心に-</p> <p>第4回 平成16年4月2日 辛島正雄(国文学)：転生する物語-物語からお伽草子への連続と断絶 -</p>
哲学・文学 部門共同プ ロジェクト	<p>・平成16年度：「西洋のオリエント、東洋のオクシデント」</p> <p>第1回 平成16年6月16日 岡野 潔(インド哲学史)：悪魔との出会い</p> <p>第2回 平成16年7月14日 小黒康正(ドイツ文学)：近代日本文学の屈折-三島由紀夫、辻邦生、村上春樹におけるトーマス・マン-</p> <p>第3回 平成16年9月8日 静永 健(中国文学)：なぜ月見ることが忌まれたのか-竹取、源氏、そして白楽天-</p> <p>第4回 平成16年11月17日 高山倫明(国語学)：言語観察における“枠組”の援用をめぐって-アクセント把握の西・東-</p> <p>第5回 平成16年12月22日 京谷啓徳(芸術学)：榎本健一誕生100周年記念ニコニコ大会-エノケン映画に見る戦前の洋楽受容-</p>
	<p>・平成17年度：「人文学を問う」</p> <p>第1回 平成17年9月7日 井手誠之輔(芸術学)：影響伝播論から異文化受容論へ-鎌倉仏画における中国の受容-</p> <p>第2回 平成17年10月19日 柴田 篤(中国哲学史)：楠本正継先生の中国哲学史研究から学ぶもの</p> <p>第3回 平成17年11月16日 竹村則行(中国文学)：明治日本の『支那文学史』と近代中国の『中国文学史』-笹川種郎と林伝甲、児島献吉郎と曾毅の著作をめぐって-</p> <p>第4回 平成17年12月14日 後小路雅弘(芸術学)：大学とパブリック・アート-青山熊治作「九州大学工学部壁画」をめぐって-</p> <p>第5回 平成18年1月18日 今西裕一郎(国文学)：『源氏物語』はなぜ王妃の密通を書くことができたか</p>
	<p>・平成18年度：第3回九大独文科研研究会との共催 平成19年2月10日</p>

谷隆一郎（哲学）：否定と超越、そしてロゴスの宿り-東方・ギリシャ教父の伝統に即して-
・平成18年度～：P&Pプロジェクト「大学とアートー「公共性」の視点から」
第1回 平成18年7月28日 木下直之（東京大学大学院人文社会系研究科教授）：大学とアートー東京大学の場合ー
第2回 平成18年11月22日 東口 豊（九州大学大学院人文科学研究院講師）：芸術における公共性
第3回 平成19年1月18日 田中 淳（東京文化財研究所美術部黒田記念近代現代美術室長）：〈画家がいる場所〉のその後と現在について
第4回 平成19年2月27日 蔵屋美香（東京国立近代美術館主任研究員）：公共の場の裸体たちー壁画の中の裸体の系譜ー
第5回 平成19年年8月1日 橋本敏子（生活環境文化研究所）：アート×大学・地域コミュニティー今何が起きているかー
第6回 平成19年年9月10日 京谷啓徳（九州大学大学院人文科学研究院准教授）：学問の場と装飾ーイタリア・ルネサンスの事例からー
金 正善（韓国東亜大学非常勤講師）：帝国のパブリックアート 和田三造作朝鮮総督府壁画

## 資料1-J 九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト（P&amp;P）実施状況

期間	研究代表者	研究課題
*平成13～14年	濱田 耕策	崔致遠撰『桂苑筆耕集』に関する総合的研究
*平成13～14年	佐伯 弘次	宗家文庫資料の形成過程と保存に関する基礎的研究
平成18～19年	後小路雅弘	大学とアート～「公共性」の視点から
平成19～20年	宮本 一夫	中国西南地区における北方系青銅器文化の生成と展開
平成19～20年	上山あゆみ	文理解システムの実用化を目指した基礎的研究

（\*は本調査対象期間外であるが、参考までに挙げる。）

## 資料1-K 公開講座実施状況

実施年度	講座名称・題目	実施期日・回数
平成16年	九州大学人文科学研究院（文学部）公開講座「言語と文芸ー和漢古典の世界ー」	7月10日～8月28日（全7回）
	九州大学人文科学研究院（文学部）公開講座「歴史資料を読むー歴史資料が語る時代と人物ー」	6月5日～6月19日（全3回）
平成17年	人文科学研究院社会連携セミナーⅠ「朝鮮半島の歴史と文化ー人と言葉と芸術とー」	10月15日～10月29日（全3回）
	人文科学研究院社会連携セミナーⅡ「言語と文芸ー和漢古典の世界ー」	10月22日～11月5日（全3回）
平成18年	人文科学研究院社会連携セミナーⅠ「九州と半島が交わるときー古代・中世の日朝関係をめぐる諸相ー」	9月16日～9月30日（全3回）
	人文科学研究院社会連携セミナーⅡ「言語と文芸ー和漢古典の世界ー」	10月7日～10月21日（全3回）
平成19年	人文科学研究院社会連携セミナーⅠ「言語と文芸ー和漢古典の世界ー」	7月28日～9月15日（全6回）

人文科学研究院社会連携セミナーⅡ「古代東アジアの歴史と文化」	9月22日～10月13日 (全4回)
--------------------------------	-----------------------

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

本研究院所属教員は、人文学としての課題を共有しつつ、多種多様な専門分野を対象としており、その具体的な研究対象や方法自体も様々であるが、資料1-B、Cが示すように、著作・論文数や科学研究費の採択率などにおいてもきわめて高い水準といえる。

また資料1-D～F、Jが示すように、COEの成果なども含めて東アジアから欧米圏まで広く国内外の研究者との共同研究が活発に行われており、各教員の業績が大いに評価されているといえる。

以上から、研究活動の実施状況に関しては、期待される水準を大きく上回っていると判断される。

## 分析項目 II 研究成果の状況

## (1) 観点ごとの分析

**観点 研究成果の状況**

(観点に係る状況)

原典の精確で豊かな理解と、理論と実証の高度な融合を行う国際水準の研究の遂行を通して、人間の学としての人文科学の確立への貢献を目的とする本研究院の(中期)研究目標に照らして、I表の研究業績を以下に分析する。

1. 国際レベルの個別研究及び相互交流の促進(世界水準の研究の推進と中核的研究拠点の形成/国際的研究協力体制の整備)

この目標の達成を示す研究として、まず、21世紀COEプログラムによる国際ワークショップに基づく、あるいはその統括の著書である1015、1016、1017が挙げられる。(この点に関しては、資料1-Fも参照)また、国際シンポジウムに基づく1007、1014も大きな成果である。そして、当該分野で最も名声のある国際学会誌に掲載された1010、1011、海外の大学、研究所との共同研究の成果である1024、1025が挙げられる。いずれの研究も国際社会に本研究院の研究成果を発信し、学術的発展に寄与するのみならず、学術交流の面で貢献するものである。(資料1-Dも参照)

2. 「共同研究プロジェクト」の計画・実施：人文科学研究院の各分野内のみならず、諸分野を横断するような共同プロジェクトを実施する。

1.に挙げたもの以外に、中型科学研究費の成果を日本独文学会からの研究叢書として刊行した1009が挙げられる。また、学際的研究として、西欧の歴史的研究であるが、法学、経済学の研究者を交えた総合的研究である、中型科学研究費に基づく1023も挙げられる。さらに、1.で挙げた1014は、学術振興会の負担金による国際シンポジウムを基に科学研究費の助成を得て刊行したものであるが、言語学を専門とする本研究院所属の教員による、心理学・精神医学・福祉工学などの分野との領域横断的な学際的な研究成果であることも特筆に値する。

3. 現代社会が直面する諸問題に真摯に取り組み、その解決の指針を社会に向かって提示する。

1005、1012は学芸文庫として難解な文芸批評書、思想書を翻訳し、解説とともに一般の読者へ紹介したものであり、1019、1020、1021、1026は、独自の実証的視点から書かれた一般向けの歴史書である。このように学術文庫としての翻訳本の出版や、一般的歴史書の出版は、その研究成果が当該分野を越えて広く学術的に認知され社会的要請があることの証明である。また、これは、当該研究の第一人者のみに許された学問成果の社会への還元であり、まさに本目標に適ったものといえる。

以上で言及した以外の研究も同様に本研究院の研究目的に向かい、学術文化に大いに貢献するものである。

難解な原典あるいは史料に取り組み、独自の論考、あるいは翻訳を行い、原典の精確な理解、理論と実証の高度な融合という本研究院の目的に適う研究の中で、特に1003、1004はわが国でほとんど研究がなされていない先駆的なものであり、1001、1002、1013、1018、1022は独創的な見解が学会誌等で高く評価されたものである。1006は、財団による学術奨励賞を受け、さらに2つの学会賞も受賞している卓越したものである。1008は、当該分野で名声を確立した出版社からの出版であり、評価の高さを示すものである。

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

本研究院の研究は、あくまでも個々の高い水準の研究を基盤にしながらも、COE や科学研究費などの外部資金をもとに組織的な共同研究を積極的に推し進め、国際的、学際的探求を活発におこなっている。また、社会への還元としての発信度も大きい。

明確な目標の下での本研究院の組織的な研究成果の蓄積と発信は、学術的、社会的評価の高さから、期待される水準を大きく上回っていると判断される。

### Ⅲ 質の向上度の判断

#### ① 事例1「21世紀COEプログラムに基づく研究成果」(分析項目Ⅰ、Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組)

資料1-Eに概要が示されているように、本研究院は21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」に採択され、平成14年～18年度にわたって各種研究会やワークショップをはじめ、国際会議等を通じて優れた研究成果をあげた。また資料1-Fに示されるように、平成17年度には「東アジア史研究コンソーシアム」というアカデミック・ネットワークが形成され、中国・韓国・連合王国を中心とした各地の研究機関・大学との東アジア研究の学術交流の場が設けられるに至った。さらに、プログラム終了後に比較社会文化学府と合同で開設された歴史学拠点コースにおいて、その成果の継承・発展が目指されている。これらは本研究院の中期目標の①「世界水準の研究の推進と中核的研究拠点の形成を目指す」および②「国際的研究協力体制を整備する」という観点から質の向上があった取組であると判断される。

#### ② 事例2「優れた国際レベルの個別研究」(分析項目Ⅰ、Ⅱ)

(高い質を維持していると判断する事例)

資料1-Bに示されるように、研究院所属教員によって遂行されている個別研究の多くはきわめて優れた国際レベルの研究であり、講座制に基づく専門的な研究体制の成果であると判断される。また本研究院の所属講座が各種学会活動の中心を担っていることは、資料1-Gに示されるように、各講座に関連学会や研究会の事務局が置かれていることから明らかであり、高度な専門性に基づいた研究会が実施されていることは資料1-Hが示す通りである。また資料1-Cに示されるように、平成16～19年度における本研究院所属教員による科学研究費補助金の採択率は、その他の資金獲得ともどもきわめて高い水準を維持している。これらはいずれも本研究院の具体的研究目標である2の①に掲げられた「国際レベルの個別研究及び相互交流の促進」に沿った活動であると判断される。

#### ③ 事例3「人間の学としての人文科学の確立に向けた共同研究の実施」(分析項目Ⅰ、Ⅱ)

(高い質を維持していると判断する事例)

本研究院は講座制の特長を維持しつつ、具体的研究目標2の②に掲げられた「共同研究プロジェクトの計画・実施」を積極的に推進している。資料1-Dにみられるように、本研究院所属講座は国際的な規模の各種共同研究を計画・実施し、また資料1-Hに示されるように、部門の枠組みにとらわれない研究会や共同プロジェクト等が学内外・国内外を問わずきわめて活発に行われており、資料1-Jのような九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト(P&P)の実施にもいたっている。さらに、これらの成果の一部は資料1-Kに示されるように公開講座等によって一般市民にも公表され、高い評価を得ている。これらの共同研究等の実施は、具体的研究目標である2の②を通して、研究目的1の①に掲げる「人間の学としての人文科学の確立」をめざす活動であり、中期目標③の「現代社会が直面する諸問題に真摯に取り組み、その解決の指針を社会に向かって提示する。」に適うものであると判断される。